

地球村ビジョン策定委員会（第2回）議事概要

日時： 令和元年 10 月 9 日(木)12:00～13:30

場所： ホテルルポール麹町 B 1 F レスカル

- 次第： 1 開会
2 議事 地球村創生ビジョンについて
（1）資料説明
（2）意見交換
3 その他
4 閉会

概要： 次第に沿って、資料説明、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- 木炭生産が多い岩手県で、非常に付加価値の高い、医学用にも使えるような炭を作り出していく。
- 林業の素材生産で効率を上げ、土場も仙台に集約土場を設けるなど具体的なことができるのではないかと。住友林業のような規模の企業の技術力を結び付けていくのがよい。
- 地球村実現に向けて、中国と一体化して進めていけばいいのではないかと。
- 東日本大震災の後、東北の中での農業に対するチャレンジが、現時点では実験的な要素にとどまっている。
- 外からの移植は意味があるが、東北の根本のところと根が繋がっていないと、地球村だけが遊離するのは問題。
- 日本の埋没に対する認識。世界の GDP に占める日本の比重が下がっており、新しい発想でどういった付加価値を生み出すのかという転機。
- 地球温暖化に対する問題意識を持ち、日本がどうするかという思想が重要。
- 工業生産力モデルからのいい意味での脱却。デジタルトランスフォーメーションなど新しい技術ファクターを視界に入れ、アジアダイナミズムを吸収・融合していく方向。
- 食と農のシンボリックなプロジェクトを I L C と併走させる。
- 関係人口のネットワーク化のように一歩踏み込む。都会と東北との移動と交流のなかで、関係人口によって活力を支えていく。中央リニア新幹線が動くことで首都圏から山梨、長野に引っ張られることに留意。
- 世界からの若者が融合して参画しているようなものがあること自体がメッセージでもある。
- ひらめきのもとに仕事をする人を相手に仕事をしなければいけないので、アメニティに対しても柔軟な構想があるし、そのアメニティの魅力がまた人を呼ぶ。

- 欧米と違い、宗教性のない都市をつくったことによって、自己規制の力が弱くなっているのではないか。戦後、工業生産力モデルで創生した町が荒れている。また農耕社会のコミュニティも崩れており、これらを超えた実験性のある大きな構想が必要。やったことのないテーマであると自覚して進める。
- 日本企業で台湾企業と提携して進出している会社は、中国進出の成功率が高い。中国を見据えたうえでも、台湾と具体的に連携が重要。
- 脱工業生産力モデルを実現させるベクトルの中に I L C があり、同じ未来を創っていく。
- 新都市的なものの構造物はコンクリート構造物ではなく、CLT 構造物的な形に変えていくという仕組みを考える。
- 東北の生産者と、世界的な食糧問題を考えている渋谷の人とがディスカッションしたほうがいいのではないか。
- 地球村としてあるべき人材育成のスタイルについて、世界に訴えて共感を得られるようにするべき。
- インクルーシブな人材をどう育成していくのが課題。東北の人材育成、教育者と一緒に考えていく。
- 世界でイノベーションをつくっていく人たちは、グローバルフリーランスとか、デジタルノマドとか、そういう人たちが固まりになっていく。それを日本として引きつけていく戦略として地球村をとらえていく。
- e-Residency のような、例えば外にいても住民と同じように暮らすことができるシステムを入れないといけないのではないか。この中にもう少しくリアに書いていただきたい。
- 農業と林業をベースとした、さらにその先の付加価値つくるなかで I L C をうまく包み込んで実現させる。
- エネルギー構造について、東北は供給先、需要は大都市から、全体の生活を自立型に変えていく。
- 年、格好、服装も含めて全部受け入れるような、そういう受容性のようなトランスな都市、地域。
- 農業の構造を、規模の拡大だけでなく、質的に変えようという取組。
- 人材育成についても、東北に閉じたのではなく、渋谷と町田、長崎などがつなげて全体が上に上がっていく。
- 農業や食など一次産業をベースにした人材育成を地球村がどのように包み込んでいくか。
- 科学技術のダボス会議でショーアップされたのは、エシック（倫理）とヒューマニティ。
- サイバー空間の中での人間の関係性と、リアルな空間の中での関係性をどのように合わせていくかが、ILC の中で実現されると、関係人口の話も、おもしろい仕組みができるのではないか。